

研究通信

No. 3

会 部 部 部
研 究 部 部 部
社 集 集 集
落 編 編 編
村 東 東 東
東 京 京 京
社 会 会 会

— 再び来年度の

大会について —

編 集 部

現在の村落社会研究会及びこの因における研究者の状態をもつては、大会は一年に一回以上もつことはできない。

それ故に全会員が一堂に会し、研究成果を発表する大会は最も有効かつ盛大にもたれなくてはならなくなる。昨年本研究会は仙台において第一回大会を盛會裡にもつを得たが、その席上において次回の大会の持ち方及び課題について二つの意見が発表された。

編集部としては前七号においてその大会の決議に従い、二つの意見を収録し、全会員の賛否、意見希望等を本部

までおよせ下さるようお願いしたのである。然るに我々の予期したよりは余りにも僅かの御返事しかうることのできなかった。編集部は来年度大会の成功の爲に再び二つの意見の要約を掲載し、会員の方々の御意見、御返事をまつ次第である。

A 氏 の 場 合

一つの意見としては、村研結成後余り日時も経ておらず、各地方に散在する人達が、夫々の問題を持って思い通りに研究して来た従来の行がかりが強いので、はつきりした一つの課題に集中してしまふと参加する事が困難な人々もあるのではないかと思うので、焦点をかなりはつきりさせても、余り厳密に一点に限定しない方が良いのではないかという意見である。協議会では家族、町村合併、兼業農家等はどうかという説があった。どれも結構であるが、かなりの含みを持たせて、農地改革に影響された家族の問題を来年度の宿題としたらどうかと思つている。会

みを持たせるといふのは、例へば、兼業農家に關心を持つ研究者でも、その角度から研究発表をして討論参加が出来ると思う。或は村の指導者の問題に關心を持つ人はその点から参加出来るので、家族の問題はいろ／＼な点から追求され得る。今の所余り狭く焦点を限定すると窮屈になると思ふので含みを持たせる方が良いと思ふのである。

研究発表及討論について、かりに非常に明白に焦点が限定されていたとしても、今の状況では必ずしもうまく展開されないのかもしれない。それは研究者の発表は多くの地区で個人的になされ、大会に来る迄全然個人的な事が多いから、全体としては比較的多岐に問題が提出される傾向である。これは各地区の共同研究、共同討議が出来ていて、各地区で大会の研究発表者をきめて、大会に臨む事が出来るようになる。大会の運営はるかに能率的、効果的になるのだと思われる。宿題のきめ方にも困難は少くなると思ふので、会員諸兄の御考えを頂きたい。

B 氏 の 場 合

私の意見の第一点は、報告者の数をもう少し減ずるとともに、報告時間を厳守するようにし、討論の時間をなるべく多くすることである。そして、その報告に対する質疑は報告直後ですませることとし、総合討論では十分に問題について討議をすることができるようにしたと思う。一般に討論のばあいには、細かい質問や技術上の質疑は、個人的にやることにして、総合討論はもちろん報告後の質疑討論も、共通のテーマに集中するようにすべきである。第二点は、以上のことと関連するが、共通のテーマについて十分な討議ができて、新しい収穫をえてかえることができるためには、テーマをしばった方がよいと思う。テーマをしばるということは、一見して参加者が少くなるように思われるが、たとえば、「農地改革による地主勢力の変遷」というようにしぼるとき、これは、各専攻分野から共通的に研究できるし、いろ／＼の

村について研究しうるはずである。そうすれば、報告しない人々も自分が調査した村ではこうであった、という形で討論に参加でき、各種の調査が出しあわされて、比較分析が行われ、理論的な収穫をえて会を閉ぢることができ。本年のような形では、報告大会にはなっても、研究大会にはなりがたい。報告時間を限定して参加者が討議に活発に参加できるためには、報告者の報告主題が明確でなければならぬと同時に、討論すべきテーマも集中できるように限られなければならない。

村研第一回大会出席所感

大山 彦 一

第一回としての大会は、あの程度で成功的であったと思います。時間の都合もありましたが、やはり報告者の報告のあとに五分位の質疑が必要であると思います。『討論会』で一括して質疑することは問題の焦点を明にしませ

ん。問題の焦点が明にされても連続して問題が提出されます。各自報告者の後の五分間質問は随分と、きいめがあると思います。お互いに峻烈な批判に堪えて、はげまし合うことが必要だと思います。此には時間を要しますから、村研も、成長につれて大会は二日におたる事を期待いたします。

かくすれば、農村、山村、漁村、農村、都市と農村、等の各部にまとも、少くとも「家族」に及ぼせる農草の影響」の部を午前中とし、或いは第一日とし、午後或いは第二日を「其他」の報告の部と出来るのではないかと考えます。

協議会で来年度の報告問題がとりあげられました。私共社会学をやつて来たものには「家族に及ぼせる農草の影響」は結構です。此テーマに親ると、村研会員の中には経済学その他社会学以外の方もあり関心が強いかもしれせん。村研は誕生日尚浅いので、諸方面の学者の関心を集め、結果を討る感

味から、此テーマに限定しない方がよいのではないだろうか。従って村研第二回大会では、午前中(或いは第一日)を「家族に及ぼせる農草の影響」とし、午後(或いは第二日)を「その他」にする折衷案を提案します。

それから「組織」の問題ですが、村研はいつれ成長につれて「組織」を必要とする時機も到来しましょう。現在の『本部』だけではやれきれないといふ客観的情勢が到来したならば、『支部』も結構でしょう。『本部・支部』という構想は村研の発展を遅く待つて然るべきものと考えます。

学向を察し、学者を養成すべきことが、第一義であると、申すまでもないことを感じます。

日本村落社会が、ひいて日本社会が徹底的に解明されることを祈ります。

私はあの大会後、東北地方のマキ研究会調査のため、青森県・秋田県・山形県をまわって旅程四十日で帰郷しました。いさゝか東北農村を勉強しました。来年は本州中部の農村を調査して勉強

したいと思っております。

みちのくの満山紅葉・獅子の舞

みちのくの稲穂乏しき 風の中

(鹿児島大学)

第一回集会后の感想

島田 隆

仙台での第一回「村研」集会をかえりみて、いろいろ意見はあるでしょうが、研究共同への第一歩として成功だったと思います。諸報告及び討論の中には、研究格闘に直接または全的に副わらないものもあって(私達の煙山村報告もその一例でしょうが)、一見、テーマが多様にも見えたが、そのためか、却て各自の村落概念がいかに多様であるかがはっきりしました。村落概念の統一は村落研究の最小限の前提だと思えますが、そもそも村落が歴史的な存在であることを考えて、村落を歴史的・具体的に究明するのではありません。従って、村落の実態調査にも

と申して、いわゆる理論的分析をほどこす場合にも、他面にたえず村落の歴史的考察を盛り込んでいきたいと思えます。この立場からの研究には、どうしても村落を全構造的に掘り下げていく必要があり、おのずから地域別にも専門別にも多数の分業にもとづく協業を必要とします。この作業を経るうちに、村落概念もしいに統一してくるし、したがって研究も一段と進展すると思えます。「村研」はその作業場として最もふさわしいものになるべきです。これはもちろん理想だとしても、幸い同じ村落研究につながるものとして、右のような意味での研究方法と成果の交流を何とかして円滑にしたいと思えます。私達は東北在住の者として、東北村落の代表的ないくつかを徹底的に研究しようとしています。日本村落の究明のためには、各地での同様な調査研究に期待する所甚大なものがあります。

来年度大会の格闘についても、いま申したようなわけで、たとえば農地改

華による村落構造の変化のあり、何か一つに問題を限定するとしても、歴史的にそれにつながる問題をも含めて、ある程度のひろがりを持つてゐるようになりたいと思います。(東北大学)

村落社会研究会に出席して

斎藤 兵市

一、共同研究テーマについて
本年度のテーマは、農村社会学に新分野を開拓するものとして適当であつた。但しこのようにな大きな問題が、全副にわたつて行われようとする北海道東北、関東、中部、近畿、中国、四国九州の八ヶ所ロスタからの発表となるようにしたかつた。これは連絡や会の方針などにもよること、思うが、われわれののきむところは、東北とか西南とかで日本より農村の構造的特徴がうきばりにされるかならともかく、地域的階級がはっきりしてゐるような。したがつて農村構造の類型論はものを見がつき、たかつたといふことである。北

海道は、他府県の農民の籍園ともいふべきところであり、北海道の農村(特に新しい村づくりとして)こそ全国の農村構造との比較においてウエイトをもつてゐるとさえ思つてゐる。

同じく農村をとりあげるにしても、畑作、水田、酪農、果樹(但し北海道の場合)などによつてこのテーマのまつ意味や内容もことなると思われる。出来れば、こうした農村をいけいけに、ついでに共同研究もほしいものと思ひます。来年度は「漁業権改革の漁村社会構造に及ぼせる影響」をとりあげてほしいと思ひます。そして北海道、東北、中部、関東、九州ぐらゐの発表がほしいと思ひます。漁村にもいろいろの型があると思ひますが、「漁場」を中心としたもの(自然村落のタイプ)と「漁港」を中心としたもの(行政村落のタイプ)とし、前者についてその構造を比較してみようというのが、われわれのねらいなのですが、会においても何らかの方法で、今まであまりとりあげられたことのない漁村の共同研究を

向題にしていただけたいと思ひます。北海道としては、二、三人の共同研究として参加したいと思つていますし、又この方面の研究もましまりつゝ、あります。

二、研究会へのお願ひ
研究物は貴重なものであり、そのまゝ放置することは惜しいと思ひますので機関誌にのせることを承んでいます(但し要項と図表又は統計)それについて、現在の通信用機関誌ではものたりないので、この際「村落社会研究」(仮称)のよるな機関誌をもらたいものです。このことは日本教育社会学会が、大会のあとに必らず発表物をまとめて出してありますへだんく、そまつになりましたが、今の会り機関通信よりはすぐれていひます。何とか経費の困難を解決してこの方向にすゝむことを期待してゐます。(会費を二〇〇円位にしてもよいと思ひます)会費をふやすことも一つの方法ですが、何かよい方法を考へていただきたいと思ひます。村落社会研究会こそはネームバリ

ユーにとらわれず、すぐれた前進をどしく世におくるように、発表の機会をあたえる意味からも、後開誌をもちたいものです。来年度の大会のもし方などについても今から御尋ね下さって会の進展をはかるような問題を提案していただきたいと思ひます。

附記

この感想文寄稿は、北大の研究室から君のきで出してくれるようとお話がありましたので、とりとめもないことながら書きました。「来年度のテーマ」と「本年度の大会の反省」の二項目についてのべておきました。

(北海道教育研究所)

宿題と大会についての希望

島崎 稔

大会特集号に発表された種々の感想とくに二つの意見のなかにみられた夫々の提案に対して、地域的にも性格的にも特殊な学校にいる私なりの希望を

述べさせていたゞきます。

A氏の意見にありましたが、各地区の共同研究のクルーアの結成を特に望みます。履地改革というような従来の社会学の知識だけではどうにもならぬ困難且広範な題目にぶつかつた場合には、とくに我々若輩の個人的研究では問題の焦点をつけないのです。(兼地委員の中央への報告書通りの報告に終つたり、技術的な問題の報告に止まつて了います)しかし、この場合共同研究のクルーアへの参加は、なんの心算的なデモンションを感じさせないほど簡かれたものであってほしいのです。クルーアが始終顔をあわせている者だけで個別的に作られるのではなく、各支部が一クルーアになるのは広すぎて有名無実なものになりがちなら、幾つかに分れるが、すべての者がいすれかのクルーアに必ず所属し、おたがいに決定した題目について始終研究会が用いられるようになったらと思ひます。そうすれば題目が限定されても参加困難になることもないし、限定された題

目の中で自己の特殊問題を生かす道も発見されてくると思ひます。

題目は勿論できるだけ早く決定していただきたいと思ひます。第一回目の題目が複雑困難であつたため、調査が行われても大会までに整理が間にあわないこともあつたと思ひます。また、こういう点からも、今年の題目を継続しながら焦点をさしぼる方がよいかもれません。

高倉氏の意見にもありましたが、村研の大会がもっと行えないものでしょうか。少くとも春と秋、年に二回位はほしいと思ひます。そうすれば一回の報告者の数を減らすというB氏の意見も実現できるでしょう。

(高崎市立大学)

漁村社会の研究

山岡 栄市

村落社会学の立場から漁村を研究しようとする時、どのような視点から研究を進めたらよいのであろうか。社会

學一般の立場から漁村の社会や文化、漁民のパーソナリティ等に關する諸問題が考えられるであろうが、就中(一)漁村という社会……農山村社会に対して特に漁村社会とよばれる独自の社会が歴史的に如何にして形成されてきたか。

(二)そのような漁村社会が後背地たる農村や都市との関連において、或はまた出稼・交易關係等による遠隔地社会との交渉においてどのような社会経済的な影響や変化を受け又は与えてきたか。その現状の分析やそれに必要な集團の史的分析がまずなされなければならぬであろう。

(一)に關連してまず注目しなければならぬことは、漁民の出稼や移住による漁粉技術の伝播と、それに伴う漁業生産力の発展、漁村社会の生成過程の分析である。そういう点に着目して、私は、漁村部落の屋号を調査し、他國の名(例えば佐渡屋、肥前屋等)をつけている家が、どのような目的でいつ頃その部落に移住してきたかを調査し

ている(屋号に現れない場合もあるので注意する)また漁村部落に発見される藩政時代の資料にあたってみると大敷あみや四ヶ張網等の伝播経路が段々と判ってくるように思う。たとえ出雲は、漁村部落の発達の上から見ると石見よりもおくれれており、この事は羽原博士のお説のように、やはり瀬戸内海より長州→石州→出雲へと伝播したようである。併し、出雲の漁村(石州にもそういう漁村があるが)へは、同時に北陸方面からの伝播経路があったようであり、この事は、幕末より明治、大正中期にわたる日本寄の廻船業の盛大と思ひ合せて、非常に興味深いものがあると思う。

(二)に關連しては、後背地との社会経済的關係を特に重視したい。いうまでもなく漁業に於ては、鮮度の高いうちに漁獲物を消費してくれる市場条件を持たない限り、経産規模の拡大は望み得ない。山陰地区島根県の漁村はその後背地が第一次産業に止まっていることと大都市消費地への輸送に時間を要する

こととによって、永く専従經營に停滯し、豊饒な漁場を有するにかゝらず、今日、北九州・山口県等の資本家的大規模經營の圧迫に苦しんでいる。隠岐の漁村はその最も典型的なものである。このような意味において、漁村の村落社会学的研究においても、それを後背地たる農村や都市、大消費地としての市場との関連において考察しなければならぬと考ふる。

(三)このような漁村社会の、いわば巨視的な研究に対応し、その内部構造や機能に着目して、階層分化の向題や労働力と人口向題、漁村家族の構造と機能、漁村通婚の特質、漁村における機能集團の性格等がその対象として浮かび上ってくるであろう。勿論この場合にも外部社会との関連を忘れてはならないが。

(四)更に漁村の文化形態や、その文化になつてゐる漁民のメンタリティが研究されなければならぬ。こゝでは、漁村文化を規定する自然的・社会的諸条件の分析を行い、漁村社

会の宗教・横行・モラル・政治意

識と世論・生活文化水準等々が研究されなければならぬ。詳細な記述はこゝで省略しなければならぬが、私の感じてゐることを一っだけ述べて結びとしたい。

今日の漢村における文化は、農山村社会に比して一般に停滞的後進的であるが、かつては、漢村の方が農山村よりも先進的であつたのではあるまいか。即ち、文化を運んで来るものがかつては海上交通であり、隨つてたとえは廻船業の盛な時代に避難港や風待港としての役割をになつた天然の良港は、文化の光が入つて来る窓であり、附近の漢村や農村に文化を伝播して先進的役割を果たして来たのではないか。いわば文化の光は漢村の前面から入つてきたのであるが、陸上交通の発達によって文化は逆に漢村の背後から、即ち都市→農村→漢村という風に伝播されるにいたり、漢村が農村よりも後進的になつたのではないかといふことを私は感じてゐる。

(高根大学)

書簡

生田 靖

拝啓 先般中国地方の会員の所任をお知らせいたゞきありがとうございます。また、山陰では鳥犬の山岡康市氏だけでしたが、ようやく一昨々日、松江に参つた折岡氏とお会いし、種々教示をうけ、又今後協力して山陰地域社会研究にたずさわる約束をしましたことは大変愉快でした。

さて、研究通信の提案につき次の意見を申しのめます。

B氏の「もつとテーマをしぼる」案に賛成です。交通不便な仙台でさえそれほど集まつたのですから、宋年の東京は一そうの盛会が予想されますので、たとえ一日会期を延長しても、盛沢山で印象がぼやける恐があります。一つ二つの特別発表は仕方がないとしても、あとはできるだけ一つのテーマに集中した方が効果的です。

(五八)

そのテーマとしては、やはりB氏の出された「農地改革による地主の変貌」などは好適です。これが農村に残存する封建性の規定の大切なポイントですし、又これなればどの地域の発表者にも研究可能テーマだからです。

何れにせよできるだけ早く宿題を決定してほしいです。それには全会員にアンケートを出して多数決によつてきめるのも一法です。

そしてテーマがきまつたら、各地の研究が比較できるように調査項目を最大限統一してやつてほしいです。たとえば、地主の変貌については、

・小作料をとつてゐるか。・大中小地主の夫々にいかに影響が及んでゐるか。・地主の子弟はどのような生活コースを辿りつゝあるか。・とにかくできるだけくわしい共通調査表を作成つてやりたいものです。そしてできれば九州、四国、中国等各地域毎に平均に発表者をわりあてるか、又は調査クルーを山村地主、水田地帯、畑作地帯等に分けて、夫々に発表者を配分するとか、とにかく高度の統一性と計画性がほしいと思ひます。

記事

◎会計中間報告

(前号既報の大会における報告以後)

・大会報告時の差引残高 一九七〇円
以後の取入 計 五四二二円
大会期間中名義売上金 七五〇円
以後名義売上金 三四七円
会費納入金(二十一名) 四三〇〇円
切手等現金引替 一五五円
・副支出 四〇六三円
切手購入 二五五円
運賃二回分 七〇円
切手(一六一通分) 一一八八円
印刷代(研究通信と考) 二二五〇円
端書購入 一〇〇円
・差引現在高 三三三九円

◎会費

昭和廿九年度分(四月以降分)より、会費に
関する規定が次のように変更になっております。

一、入会費 不 費
一、会 費 年額 三百円

◎会 員 名 簿

昭和廿一年十月一日現在

振替口座 東京三菱銀行八八六番
村若社会研究会

◎新規会費納入者

(隔既報以後、隔には休載)
泉 靖一・米村昭二・照 敬吾・椋田勝彦・
リンドストロム・小森健治・林 三郎・岡村
精一・黄志正造・川原 勇・野口(御名未詳)
林 稀苗・阿部政太郎・小林茂・椋井太郎・
二宮吾雄・布村一男・石原通子・廣田忠夫・
高橋正彦

◎なお、既に次の姓氏より廿九年度分会費払込
みを済ませております。

山本 登・小寺廉吉・二宮吾雄

◎圖書紹介

『研究年報』経済学(一九五三) 剛東
北大学経済学研究室 発行所 仙台市平町
東北大学経済学部内 東北大学経済学会、長巻
仙台四九二八番、定価一八〇円、送料二四円
中村吉治 煙山村調査報告(一)
——封鎖的村落共同体の研究——
島田 隆 幕末明治初期煙山村の労働組織
塩沢君夫 岩手県煙山村の一農家経営
矢木明夫 南部藩煙山村水利組織について
の原が、二論文を収載している。

『研究年報』経済学 第廿九号』
には、その続編が次のように掲載された。

煙山村調査報告(二)
幕末における水ノ目留山と村落構造
安孫子 麟
菅野 俊作

◎なお、本稿に残された問題については、東北
大学「農学研究所集報」第五巻第三号以下に報
告の予定の由である。

〔五九〕

仙台の大会は、私の予想していたものとはかなりの隔りがありましたけれども、今年の様な会を持ち方も又懸念義ではなかつたと思われます。未だ第一回目なので、仮令様々の不満足な点があつたにしても、それは今後あらためるとして、もう暫らくの間は今年の形式を踏襲してみたら如何でしょうか。早速に変更を加えることをしないで、焦つたにもり育て、ゆけば、その中に自ら最も相応しい形式と内容とが作られてゆくのではないのでしょうか。とかく農村社会学という領域から考えがちなりませんが、テーマの選択も、研究討論の方法も、できるだけ広い分野から参加できる様なものにして、文字通り村若社会研究会にしたいものだと思います。

なお、社会学会大学に引き続いて三日間に亘るといふことは、種々の点で負担が重過ぎるのではないかと考えられました。

(北海道大学)